



# ラーメン



筑駒電子書籍文庫

飯塚志希

## <九月>

玄関を出ると、外は爽やかな秋晴れだった。わたしは大きく息を吸ってから、ビルの中の張りつめた空気を思い切り吐き出した。わたしと同じように、大勢の中学生が、友達と一緒に笑ったりしゃべったりしながら建物から続々と出てくる。興奮した様子の子も、少し残念そうにしている子も、ひとまず安堵した表情をしていた。みんなは、駅のある方へ向かって坂をくだっていく。わたしは、みんなとは逆方向に、坂の上を目指して歩き出した。

坂を上って少し行ったところに、一軒のラーメン屋がある。カウンター席が十席ほどあるだけの小さなラーメン屋。あまり流行っていないのか、それとも午後二時過ぎという時間が悪いのか、人が入っているところを見たことがない。三か月前になんとか入ったこの店がわたしは気に入って、それ以来、月に一度、必ず来るようにしている。

暖簾をくぐり引き戸を開くと、いつもの通りおじさんがカウンターの椅子に座っていた。おじさんは私に気づくと、

「いらっしやい！待ってたよ」

と声をかけてきた。まだ今日で四回目なのに、すっかり常連になってしまった。なぜか定位置になってしまった手前から三番目の席に座る。わたしはいつものと同じ醤油ラーメンを注文した。もうある程度の準備はしていたのか、数分で出てきた。

醤油色のスープの底に漂っている麺を箸ですくって食べる。魚介の味がよくしみこんだスープが絡まった細麺の味が、口いっぱい広がった。だしがしっかりしみこんでいるけど、あまりしつこすぎない、さっぱりした味。この味がわたしは好きで、模試の後は必ずここに来る習慣ができてしまった。今日も前と同じラーメンを味わえてうれしい。わたしは夢中になってラーメンをすすっていた。

突然引き戸が開く音がした。背なかでこの音を聞くのは初めてで、幾分ぎよっとした。

「いらっしやい！」

おじさんの声にも少し驚きが混じっている気がする。どんな人が来たんだろう。振り返ろうと慌てて麺を吸いこんだ。途端、口の中が熱い麺でいっぱいになる。熱い。やけどしそうだ。飲み込もうにもなかなか飲み込めない。少しずつ飲み込んで、口内に余裕ができたところで水を流し込み、何とかすべて飲み込んで一息つく。ようやくわたしは後ろを振り返った。

同じ年ぐらいの男の子だった。真っ白な半袖のワイシャツに黒い長ズボンだからおそらくどこかの制服だろう。そのきれいなシャツとは対照的に、薄汚れたスニーカーと傷だらけのボストンバッグを抱えている。その男の子は少し戸惑ったような表情をして目をチラチラとあちこちに動かしている。わたしと同じ模試を受けた子だろうか。

まあいいやと思った私は、気にせずラーメンを食べることにする。カウンターに向き直ると、ラーメンはさっきと変わらず、やわらかい湯気をあげながらそこに佇んでいる。箸を右手に握りなおして麺をつまもうとしたとき、男の子がわたしの右隣にやってきて、ゆっくりとそこに座った。がら空きのなになんで隣に来たんだろう。

しばしの静寂。男の子は、目の前に立ててあるメニューも見ずに、何もないカウンターを見つ

めている。おじさんが話しかけてようやく醤油ラーメンを注文したようだが、その後もずっと下を向いたままだ。暗い人なのかなと思った。わたしの言えたことじゃないけど。

「へい醤油ラーメンお待ちどお！」

とおじさんがどんぶりを男の子に出した。声がいつもよりうきうきしている。予想外の繁盛——といっても二人だけだけど——がうれしかったのかもしれない。男の子は何も言わずにラーメンを食べ始めた。

男の子は左利きだった。

「おじさん、ごちそうさま」

立ち上がって、代金とどんぶりを一緒に置く。今日もおいしかった。

このお店の回転イスは少し高めで、身長が低いわたしでは足が全く地面につかない。そのため、降りるときはいつも気を使っていたのだが、今日はちょっと油断した。着地した時、思わずバランスを崩してしまった。まずい。なんとか立てなおさなきゃ。そう思ったが間に合わない。わたしは、ひざを強く地面にぶつけた。体はそのひざを中心にして、地面へ倒れこんでいく。堅そうなセメントの床の一点に視界が急拡大されていく。わたしはとっさに両腕をからだの前に出した。

瞬間、両腕に固い衝撃が走る。なんとかそのまま倒れるのは回避できたが、床に四つん這いの状態になってしまった。灰色の床は油でべたべたしているかと思ったが、ひんやりと乾いていて、思ったよりも心地よい感触だった。わたしは、ちっとも気にしていない、という風に、わざとゆっくりと立ち上がって、別に汚れたわけではないが、制服のスカートをパンパンとはらった。顔の前にたれてきた髪の毛を、人差し指で耳の後ろにどける。わたしはそっと後ろを向いた。あわよくば誰にも見られてないことを期待したのだが……。ダメだ。ぼつちり見られた。おじさんの方は心配そうにこっちを見ているし、男の子なんて驚いて目を真ん丸に開いている。

転んだ拍子に抱えていた学生鞆を放りなげてしまった。中身が散乱している。筆箱、学生証、髪ゴム……。わたしはもう一度しゃがみこんでそれらを拾い上げ、鞆にしまった。

「それじゃおじさん、ごちそうさまでした」

そう言って出ていこうとしたとき、聞きなれない声が出た。

「待って」

あの男の子の声だとすぐにわかった。思ったよりも低い声だなと思った。振り返ると、男の子が硬い表情で、小さな何かを持ってこちらに歩いてくる。

「これ……おまえのだよな」

少しぶっくらぼうに差し出してきたのは、塾の会員カードだった。拾い損ねていたらしい。まいったな。わたしは同年代の子と話をするのが苦手だ。

「あ……。ありがとう……。ございます」

「いや、おれも中三だから、敬語じゃなくていいよ。さっきまで模試受けてたんだろ？おれもそうだよ」

「そうなんだ」

出来るだけ目を合わせないようにして、カードを受け取る。そのまま出口へ向かった。

「じゃあ……」

「ああ、じゃあ、また……」

男の子の声を背中で聴きながら、静かに引き戸を閉めた。外は相変わらずよく晴れていて、涼しい風が吹いている。同じ模試か……。なら名前くらい聞いておけば良かったかな。わたしは駅のほうへ坂を下りながら、そう思った。

最悪だ。塾帰りの人の波に流されながらおれはそう思った。

よく考えたら、今まで部活一辺倒で、なんの受験勉強もしてなかったおれに、入試本番レベルのテスト問題が解けるわけがないのだ。誘ってきた友達と一緒にとっとと帰ろうかとも思ったが、そいつは塾の友達と一緒にすでにどこかへ行ってしまっていた。

そのまま一人でさびしく家に帰る気分にはなれなかったので、ためしにロビーで塾のパンフレットをパラパラとめくってみたが、さっきのテストを思い出して憂鬱になるだけだった。

仕方ない。外に出てみよう。

ビルの出入り口付近には、模試を受け終わった生徒たちが、まだ結構な人数残っていた。上を見上げると、高い透き通る空に、所々雲が浮かんでいる。嫌になるほどいい天気だった。いっそのこと台風でも来てくれればこんな思いをしなくて済んだのに、と思った。

外に出てみたはいいものの、近くに何かあるわけでもない。駅の周りにいくつか飲食店があったが、塾生がたむろしているかもしれない、そんなところへ入る気分にもなれない。

ちょっとした反抗心。おれはみんなとは逆の方向へ行ってみることにした。

駅前のビジネス街のような雰囲気とは対照的に、閑静な住宅街が広がっていた。のんびりした雰囲気が何となく心地よい。リンドウが植えられた庭の真ん中で、二匹の猫が丸くなって昼寝をしていた。

しばらくまっすぐ歩いていくと、ひとつののぼりが目に入った。赤地に白で「ラーメン」とだけ書いてあるシンプルなものだ。近づいてみると、昔ながらの玄関のような引き戸の入口に、「営業中」と印刷された白い小さな板がかかっている。そういえば最近あまりラーメンを食べない。おれは、そのラーメン屋に、入ってみることにした。

「いらっしやい！」

店に入るなり、そう声をかけられた。

中は思っていたよりも狭かった。木製のカウンターに、高めの座椅子が十脚ほど並んでいるだけのシンプルなお店だった。午後二時ごろという中途半端な時間だからか、お客さんは制服姿の少女が一人だけだった。

おそらくこの子もさっきの模試帰りだろう。さっきの憂鬱な気分が再び顔をのぞかせる。どうしよう。やっぱりやめようか、という考えが頭をもたげたとき、ずっと向こうを向いていた少女がこちらを振り返った。

その少女は、赤縁の眼鏡をかけていた。レンズの奥から、くりんとした大きな瞳を丸くしてこちらを見つめていた。ラーメンを食べているせいか、顔がほんのり上気して頬が赤くなっている。肩のあたりまで伸びた髪の毛はやわらかく内側にカールしていて、とてもさらさらしているように見えた。

その少女にこちらを見られた瞬間、おれは縛り付けられたような気分になってしまった。目が泳ぐ。全身の筋肉が固まってしまったような気がする。心臓は逆にバクバクとすごい勢いで脈を打っていて、下手をすると音が聞こえてきそうだった。

はっと我にかえる。とりあえず、立ちっぱなしはおかしい。どこかの席に座らないと。そう思って歩き出したが、歩き方がどこかぎこちないのが自分でも分かる。あのPKのときだってこんなに緊張しただろうか。足元がおぼつかない。なんとか目の前にある椅子に座ることに成功した。一瞬遅れて、すぐ左側に人影があるのに気づく。失敗した。自分を殴りたい。心の中で自分に大声で怒鳴りつける。なんで隣なんか座るんだ。逆の立場になってみる。がら空きの店で知らない男が隣に座ってきたら不可解な事この上ないじゃないか。気まずさのあまり、おれはカウンターの木目を見つめることしかできない。文字通り顔から火が出そうな気分だ。

「兄ちゃん、なにを注文する？ 醤油ラーメンがオススメだよ」

とラーメン屋のおやじが少し笑っているような調子で言う。これはバレてる。絶対バレてる。

「じゃあ、それで……」

と何とか返事をする。少女はこちらを気にする様子が全くないことがせめてもの救いだ。淡々とラーメンを食べ続けている。少女のほうに目を向けてみたいが、気づかれるのが怖いので、ひたすら木目を見続ける。そのうち、穏やかに湯気を上げるラーメンが目の前に出された。

とりあえず食べよう、と割り箸を手にとったとき、おれは自分が新たな危機に直面していることに気づいた。おれは左利き。そして、おれの左どなりにいる少女は、多くの日本人がそうであるように右利きだ。つまり……肘があたる。やってしまった。

誰かの誕生日会や試合の後、外で食事をするときは必ずおれは左端に座っていた。そうしないと、肘がぶつかって互いの食事に支障が出るからだ。そのへんは親にも厳しくしつけられた。それがどうだろう。こんなところでミスするとは。今更席を変えたりしたらかえって不審に思われる。できるだけ当たらないように肘をすぼめるしかない。ラーメン屋のおやじはそんなおれの苦悩に気づいているのかいないのか、ずっとニヤニヤした表情を浮かべていて、それが余計に恥ずかしかった。

食べづらいが何とか箸で麺をつまんで食べることに成功した。ラーメンは案外うまかった。

「おじさん、ごちそうさま」

隣で声がした。少女が立ち上がってどんぶりとお金をカウンターに慣れた様子で置く。そんなひとつひとつの動作にまでどぎまぎしてしまって、いったい自分はどうかしているんじゃないかと思ってしまう。この子が帰れば、自分は一人になる。ようやく落ち着いてラーメンが食べられそう。少女がいなくなってしまうことよりも、まず自分が取り戻せそうなことに安堵した。

と、次の瞬間。少女が突然倒れこんだ。椅子から降りようとしてバランスを崩したようだ。こちらに足を向ける形で四つん這いになっている。顔は見えないので表情はわからないが驚いた様子が伝わってきた。ゆっくりと立ち上がって、スカートを払い、髪を指でそっと整えながら、少女はこちらを振り向いた。突然のことに驚いていた、というのもあるが、おれはその動きに見とれてしまっていて、身動きひとつとれなかった。

少女が、転んだ拍子に落としてしまったものを拾い上げていく。手伝った方がいいだろうか、としばし逡巡するうちに、ほとんどすべて拾い上げられてしまった。あとは塾の受験票らしきカー

ドだけだ。ところが少女はそれを拾わず、

「それじゃおじさん、ごちそうさまでした」

と店から出ていこうとした。これを渡さないと彼女は困るんじゃないだろうか、と思いつつも、気恥ずかしくてなかなか声が出せない。これを渡せば少女としゃべれる、という下心が、よけいに気恥ずかしさを強くしていた。だが気づいているのに渡さない、という行為への良心の呵責に耐えきれず、おれはなんとか声を絞り出した。

「……ま、待って」

と情けないかすれた声が出た。変なふうに思われていないだろうか。

女の子が振り返った。カードを拾って女の子に近づく。変な顔にならないよう、精一杯顔に力を入れる。

「これ……おまえのだよな」

「あ……。ありがとう……。ございます」

「いや、おれも中3だから、敬語じゃなくていいよ。さっきまで模試受けてたんだろ？おれもそうだよ」

なにを偉そうに言っているんだ、と思った。だが、今の自分にセリフをコントロールする余裕などない。ただただ言葉を発するだけで精一杯だった。

「そうなんだ」という少女の声はやわらかくて耳に心地よかった。もう少し聞いていたかったが、少女はすぐに

「じゃあ……」

と行って出て行ってしまった。少女を見送ったあと、おれはそこに立ち尽くしていた。後ろでおやじが

「いいなあ、恋って」

と勝手なことをつぶやいていた。

数日後。

試験の結果がとどいた。おれの結果は予想通りひどい有様だったが、それよりももっと気になることがあった。あの日拾った受験カードには、少女の名前が記してあった。おれはそれを覚えてしまい、その名前が頭でぐるぐるとまわり続けていた。もしかしたら、その子が現実にその模試を受けていたという、確証が欲しかったのかもしれない。おれは成績優良者のページを開き、その名前を探し始めた。

探すまでもなかった。彼女の名前は上から三番目の所にあった。この模試は首都圏全体で実施されている、かなり規模の大きい模試だ。彼女はその模試で女子にして第三位をとっていたのである。

「マジかよ……」

おれは思わずつぶやいた。

## <十月>

今月も模試が終わった。数学の最後の問題で計算ミスをしていたが、終了間際に気が付いて解き直したから、多分あっているだろう。筆箱を鞆の中にしまい、肩に抱え上げたとき、三人の女子がやたらと大きな声でしゃべっているのが耳についた。数学のテストの答えが割れたらしい。真剣に話し合っている姿はちょっとだけ楽しそうだったが、残念ながら答えは三人とも間違っている。

空は深い深い青色をしていた。木曜日まで本州南部に居座っていた太平洋高気圧は、秋雨前線とともに南へ逃げていき、最近切り替わったばかりの冬服が、今日にはちょうどいいくらいになった。

またいつものように坂道を上がる。思えば、六月の模試から毎月ここを通っているから、もう五回目という事になる。五という数字は、合格に通じるので、受験生には縁起が良い。何となくめでたい気分になる。家の前に植わっているキンモクセイの木には淡い橙色の花がついていて、通り過ぎる時にふわっと甘い香りがした。

引き戸をひくと、いつものように中からおじさんの声がかかる。暖簾をくぐって中を覗くと、そこはいつもの光景と少し違っていた。先月の男の子が、カウンターに腰を下ろしていた。男の子は、わたしが来たことに気づくと少し驚いた様子だった。

「おやじ、じゃあおれ醤油ラーメンで」

とおじさんに声をかける。まだ頼んでなかったんだ。普通に座っているからてっきりラーメンを待っているものと思った。

「わたしも醤油ラーメン」

「はいよ。そこに座りな」

席を手で示されたところは、男の子の右隣だった。少し違和感を覚えたが、示された場所と違う所に座るのも気が引ける。そのまま指定された場所に座った。

静かにラーメンが来るのを待つ。男の子はどこか落ち着かない様子で、カウンターの上で組んだ指を動かしたり、椅子を軽く回したりしている。せっかちなタイプなのかもしれない。

ラーメンは二つ一緒に出てきた。

普段は声に出して「いただきます」と言っていたが、今日は手を合わせて心の中で唱えるだけにする。男の子もさっさと食べ始めていた。わたしも、黙ってラーメンを味わうことにする。わたし達は、しばらく黙ってラーメンを食べ続けた。

しばらくして、突然名前を呼ばれた。麺をのどの奥にごくんと落とし込んでから「え？」と返すと、

「いや、ごめん。前に受験カード拾ったときに名前見てて」

「ああ……」

よく覚えてるなあ。一か月も前なのに。このひと、相当記憶力がいいらしい。

それを素直に告げると、まあな、と笑いながら返された。余裕の表情だ。

「あなたの名前は？」

「え？」

「名前。聞いておこうかと思って」

「ああ……。うん、いいよ」

名前を教えてもらった。

「模試って最初から受けてんのか？」

「うん。六月から」

「そうか……。おれは九月からだよ」

「へえ……」

再び静かになった。ラーメンをすする音と、天井近くに置いてある、今時珍しいブラウン管テレビから流れるサッカー中継だけが聞こえる。わたしはラーメンを味わうことに集中することにする。

ラーメンもほとんど食べ終わるといふ頃、突然話しかけられた。

「おまえはさ……。その……。どこの高校に行きたいんだ」

いやな質問が来た。一番よく聞かれるけど、一番答えるのが面倒くさい質問。わたしは、箸の先でスープに浮かぶネギをつつきながらぼそりと答える。

「……都立春海台高校」

「すごいな。そこめちゃくちゃ難しいところだろ」

決まってこういう反応を返される。わたしはこれに一体なんて返せばいいんだらう。聞かれるたびに考えているが、答えらしい答えはいまだに出てこない。

仕方がないので沈黙で返事をする、彼は意外な言葉を投げかけてきた。

「なんで？」

「……え？」

思わず彼のほうを向く。目が合った。

「いや、なんでそんなすごい学校に行きたいのかと思って」

なんでかって？ そりゃあ—————。

分からない。分からなかった。その場でぱっと思いつかないとか、うまく言えないとか、そういう事ではなかった。分からないのだ。正体不明の恐怖が全身を駆け巡る。なぜ、私はその学校に行こうとしているんだらう？ 分からないことへの驚きといいようのない不安で目の前が真っ暗になる。まるで心の中が空っぽの空洞になったようで、わたしは何が何だか、分からなくなってしまった。

ガタン！と大きな音がしてわたしははっと我に返った。彼が立ち上がっていた。

「ごめん、立ち入った事聞いちゃって。理由なんてなんでもいいよね。じゃあまた」

そういつて彼はお店の外に出て行った。

わたしはそれをぼんやりと見送って————。その姿を追いかけて椅子から飛び降りた。

外に出ると、彼は十メートルほど離れたところにいた。声を張り上げて呼び止める。

「ねえ！」

彼が立ち止まる。ゆっくりと振り返る。わたしはさらに声を張り上げた。

「あなたは！あなたはどこの高校に行きたいの！」

急に走ったので、おなかが少しむかむかする。彼は、ゆっくりと口を開いた。

「おれもおまえと同じところだよ。……都立春海台高校に行く」

そんなに大きい声ではなかったのに、彼の低い声は遠くまでよく聞こえた。

「そう……」

その答えを聞いて、今わたしを突き動かした意思はしぼんでいってしまい、質問をつづける気分にはなれなくなってしまった。

「じゃあね。また今度」

といって、手を振った。彼も笑って手を振り、そのまま駅の方へ坂を下って行った。

普段ならもう寝ている時間だが、わたしは寝間着姿でベッドに寝ころがったまま、なかなか眠れずにいた。眼鏡はつけていない。昼間、男の子に言われた言葉が、頭の中で響く。

なんで――？

たった一言だけなのに、わたしのすべてを見抜かれてしまったような気がした。

良く考えてみれば、今まで志望校を聞かれたことはあっても、その理由を聞かれたことはなかった。素直に「都立春海台」と答えれば、「へえ～すごいね～」とあまり感情のこもらない声で返されるだけだし、それが嫌で何となくはぐらかせばそこで会話が終わってしまう。その先、さらに奥に入りこまれることはなかったのだ。

誰も踏み入ってこなかった、わたしの奥にある領域。そこに彼は、いとも簡単に入り込んできた。不思議と嫌な気分にはならなかった。

それにしても、とわたしは思う。どうしてわたしは春海台高校に行こうと思っていたんだろう？

なんでこんなに必死になって勉強してきたんだろう？ 疑問が堂々巡りを繰り返す。わたしは、まくらに顔をつっこんで、声にならない声でさげんだ。